

## 今週の為替相場見通し(2020年4月27日)

| 総括表      |      | 先週の値動き |                 |        | 今週と来週の予想レンジ     |
|----------|------|--------|-----------------|--------|-----------------|
|          |      | 注      | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |        | 107.28 ~ 108.05 | 107.52 | 106.50 ~ 108.50 |
| ユーロ      | (ドル) |        | 1.0728 ~ 1.0896 | 1.0820 | 1.0600 ~ 1.1000 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |        | 115.56 ~ 117.29 | 116.35 | 115.50 ~ 118.50 |
| 英ポンド     | (ドル) |        | 1.2248 ~ 1.2498 | 1.2365 | 1.2200 ~ 1.2550 |
| (1英ポンド=) | (円)  | *      | 131.91 ~ 134.73 | 132.98 | 131.00 ~ 135.00 |
| 豪ドル      | (ドル) |        | 0.6254 ~ 0.6406 | 0.6397 | 0.6100 ~ 0.6700 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | *      | 67.29 ~ 69.01   | 68.71  | 66.00 ~ 72.50   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1)今週の予想レンジ: 106.50 ~ 108.50 円

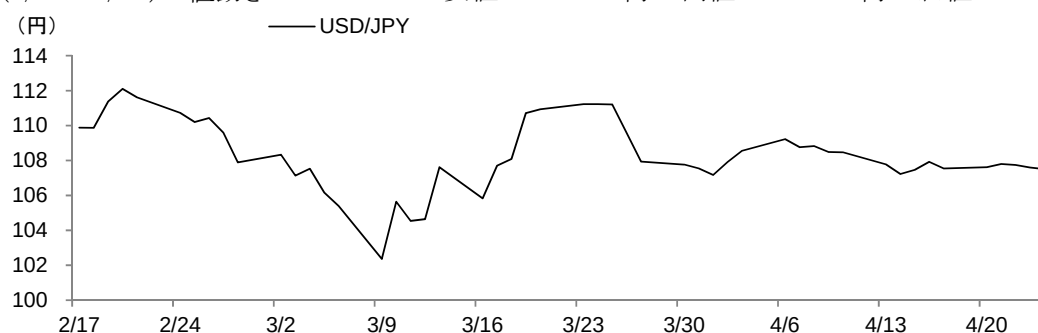
(2)ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週のドル/円相場は107円後半を中心とした狭いレンジでの推移が続いた。週初20日に107.70円でオープンしたドル/円は、五・十日絡みの本邦輸入企業のドル買いに108円手前まで上昇するが、動意に乏しい展開。米国時間に5月限WTI原油先物がマイナス価格で取引されるも、為替相場への影響は限定的だった。21日、日経平均株価の下げ幅拡大や米金利低下を眺めてドル売り・円買いに押され、一時週安値の107.28円まで下落。その後、シューマー米上院院内総裁が新型コロナ追加対策を巡り「暫定合意がまとまり、法案は本日可決するだろう」と発言すると徐々にドル買いが強まり、107円台後半を推移。22日はブレント原油先物が一時16ドル割れとなる動きを横目に107.52円まで下落する場面もあったが、その後米金利上昇や米株の上げ幅拡大を受けてドル買いが先行し、107.94円まで上昇。23日は、欧州の4月景況感指数や月例経済報告、米国の新規失業保険申請件数の発表を経て107.35円まで下落。その後、日銀がコロナ感染拡大への対策として、国債購入の上限額撤廃とCP・社債の購入額倍増を検討との報道を受けて一時週高値となる108.05円まで上昇したが、米製薬会社開発の抗ウイルス剤が治験初回が成功しなかったことを報じられると上昇幅を失い、107.60円付近で小動き。24日は来週に予定されている日米欧の中央銀行の金融政策会合を控え、様子見ムードの中、上値の重い推移が続き107.52円で週越した。

今後2週間のドル/円相場は新型コロナ関連のヘッドライン及び各国中央銀行の金融政策の動向次第ではあるが、107円台後半の底堅い推移を予想。27日(月)に先行して日銀が金融政策決定会合を開催し、特にCP・社債の購入上限額倍増や3月に創設した金融機関向けの「新型コロナウイルス感染症にかかる企業金融支援特別オペ」の拡充への観測が高まっており、実際にこれに近い内容が決定されれば、先週のようにドル円のサポート材料となろう。一方、28日(火)~29日(水)のFOMCでは新たな政策発表は無いであろう。現行金利水準に高すぎるといったFed高官の発言はなく、今金利を更に押し下げたところで経済活動そのものが停止している間は総需要の刺激にはならないため、現状維持に留まろう。その他、今週の経済指標は28日(火)米4月卸売在庫、29日(水)米1~3月期GDP(一次速報)、30日(木)米3月PCEコアデフレーター、米3月個人所得、5月1日(金)米4月マークイット製造業PMI、米3月建設支出、米4月ISM製造業景気指数、翌週末5月8日(金)には米4月雇用統計が控えている。

### (3)先週末までの相場の推移

先週(4/20~4/24)の値動き: 安値 107.28 円 高値 108.05 円 終値 107.52 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.1000 115.50 ~ 118.50 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に安値をつける展開。週初20日に1.08台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、ユーロ/ポンドの上昇に連れ高となり一時週高値の1.0896をつけた。ただ、米株が下げ幅を拡大、ユーロ/円の下落する動きに上昇は一服。その後は、方向感に欠ける展開が続いた。21日は、世界的な株安と原油安を背景にリスクオフのドル買いが続き、一時1.08台前半まで下落。その後、ユーロ/円の上昇に後押しされ、1.08台後半まで連れ高となった。22日は、オープンからじり安の展開が続き、ユーロ圏4月消費者信頼感指数が予想を下回ったことでユーロ売りの勢いが増し、一時1.08付近まで下落した。23日は、経済指標の下振れに1.07台半ばまで下落。その後、メルケル独首相が「ウイルス対策予算は巨額であるべき」とEU各国首脳に述べたと伝わると、1.08台半ばまで上昇。ただ、「EU首脳会議、救済策の合意なし」とのヘッドラインにユーロは売られ、1.07台後半で上値の重い推移となった。24日は、週末を控え終盤にかけてショートカバーの買いに支えられ上昇。しかし、EU首脳会議は意見が割れたために詳細が先送りされたことで、ユーロの不透明感はぬぐえず上値は重く、1.082で越週した。

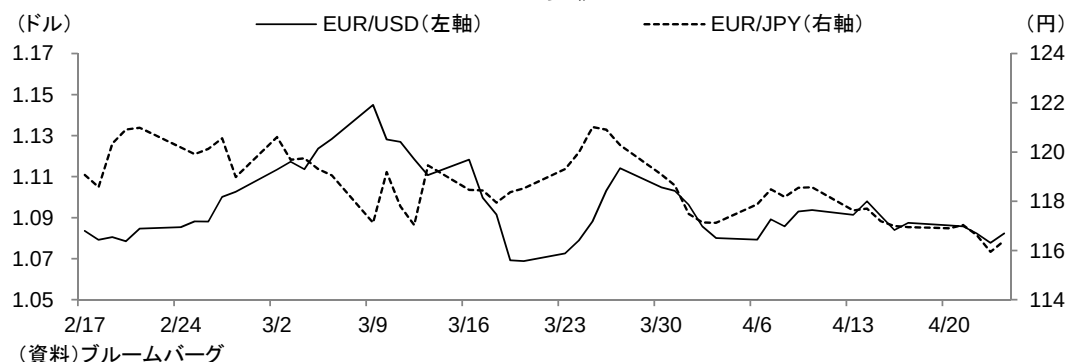
今週及び来週のユーロ相場は上値の重い展開を予想する。欧州の新型コロナウイルス感染者数の増加率はピークを付けたと思われるが、生産活動の停止は続いており、ユーロ圏の景気回復の道はまだまだ長いと思われる。フランス等ロックダウンの一部解除を目指す動きもあるが、依然どの国においても行動規制がある程度維持されており、4~6月期の経済活動に圧力がかかり続けることになるのは明白となっている。係る状況下、今後は各国協調の上での財政政策と、ECBによる金融緩和に加えて、どのタイミングでロックダウンが解除されてくるのかが注目されよう。4月23日(木)に開催された欧州首脳によるテレビ会議では、2兆ユーロ規模の復興計画案を準備していることが明らかになっている。各国意見が割れる中、異なる財政規律のスタンスをすり合わせる作業は難航するだろうが、ユーロの景気回復には必要な措置だろう。金融政策については、月末にECBが予定されている。3月に2回の政策理事会を開催し、包括的な緩和を打ち出したばかりで、今回の追加緩和の可能性は低い。今後は欧州域内の景気回復まで、引き続き上値の重い展開が想定される。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(4/20~4/24)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0728 高値 1.0896 終値 1.0820

(対円) 安値 115.56 高値 117.29 終値 116.35



## 3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2550 131.00 ~ 135.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週の英ポンド相場は、下落。ただしその下落はほとんど21日に集中し、その後週末まではむしろ堅調を支配的とした。21日のポンド安は、対ドル、対円、対ユーロなどではほぼ一斉に始まった。特定の通貨ペアでまとまった規模のポンド売りが仕掛けられ、それが連れ安を誘ったような様子も読み取れず、明確なポンド売り要因の存在が想定されたが、残念ながら、そうした要因は特定できなかった。市場の一部に、「コロナでEUとの離脱交渉に遅滞が生じているにもかかわらず、英側が年内の離脱に拘泥している」ことを、(自由貿易交渉などがまとまらないままの)新たな「合意なき離脱(クリフエッジ)」リスクと警戒する動きもあったようだが、英側の強硬姿勢は17日の時点で既に観測されており、仮にこのタイミングであらためて材料視されていたとしても、そのきっかけは判然としなかった。頭書の通り、ポンドが大きく売り込まれたのは21日だけで、その後週末に掛けては、特段の材料もなく、堅調気味の横這いが支配的となった。対ユーロで22日に明確に反発したり、対円で23日に乱高下したりといった局面も見られたが、これらは、それぞれ、「欧州中銀が資産購入策の担保要件を広げる」「日銀が無制限の資産購入策に踏み切る」といった観測を材料視したユーロ側、円側の値動きと考えられた。この間、21日に英12~2月失業率(ILO基準)、22日に英2月CPI、24日に英3月小売売上高など主要英マクロ経済指標の発表が相次いだ。ポンドが材料視した様子は読み取れなかった。12~2月失業率の(11~1月の3.9%から4.0%への)上昇を、「新型コロナ問題が本格化する前の数字にもかかわらず」という文脈で懸念する声も聞かれたようだが、統計発表とポンド下落のタイミングには3時間以上の開きがあった。

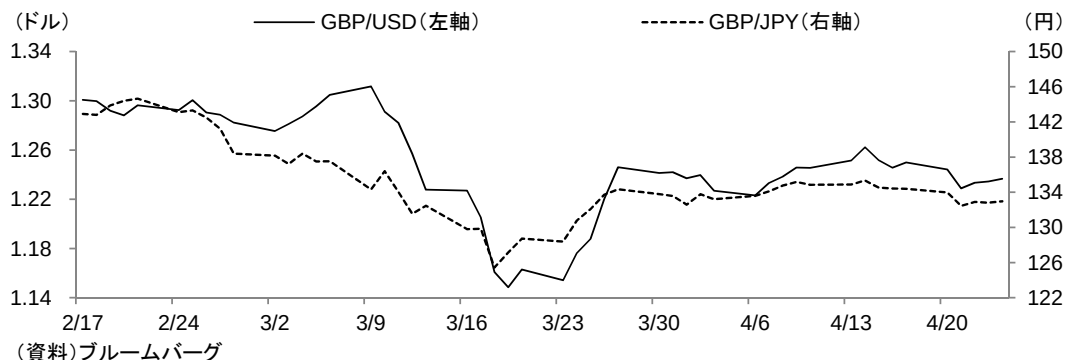
今週・来週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横這いを予想。上述の通り、先週の値動きを振り返っても、ポンド側に何か材料があったようには思われなかった。現時点で、こうした状況に変化が現れる理由を思いつけないのが、方向感の欠如を見込む理由。27日(月)に日銀金融政策決定会合、29日(水)に米連銀公開市場委員会、30日(木)に英中銀金融政策委員会、欧州中銀理事会などが相次ぐのは興味深い。先週見られた、欧州中銀側、日銀側の要因による値動きを振り返っても、一定の注目は必要だろう。ただ、主要国中銀は、この間、まるで競うように積極的な金融緩和策を繰り出してきており、米が先行すれば、欧州も追随するというような状況で、金融政策が通貨市場の決定的な方向感を作る可能性も考え難いのではないか。この間、ポンドが材料視したわけではないものの、中期的な視点で興味深いと感じられたのは、英3月小売売上高に見られた食品売上高の上振れ。3月半ばから本格化したロックダウン(外出制限)の影響で、食材や薬品を扱う以外の小売店は軒並み閉店しており、当然のことながら総合指数は前月比-5.0%と急減していたが、食品だけは前月比+10.4%と突出した増加を見せていた。この背景には食品在庫積み上げという特殊事情もあったはずで、食品消費の上振れがこのペースを保ったまま続くとは考え難いものの、「コロナ後」の消費行動を占う上で示唆に富んでいる。飛行機に乗らなくなっても、映画館に足を運ばなくなっても、人間、食えることは止められない。英3月CPIには、食品価格の目立った上振れは確認できなかったものの(保存の効く「非生鮮食品」の価格に上振れの兆候は読み取れたものの)、人々の消費行動が変化の中で、CPIバスケットの構成比率も、当然、食品の比重を高めるはずで、仮に今後、食品価格に上昇圧力が強まるとしたら、従来以上の物価上振れ圧力として定着する可能性も考えられるのではないだろうか。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(4/20~4/24)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2248 高値 1.2498 終値 1.2365

(対円) 安値 131.91 高値 134.73 終値 132.98



## 4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 岡本 明生

(1) 今週の予想レンジ: 0.6100 ~ 0.6700 66.00 ~ 72.50 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週の豪ドルはもみ合いとなった。20日は0.63台半ばでレンジ推移となっていたが、NY時間にCMEの「WTI先物はマイナス圏での取引も可能」との発表を受け、投げ売りが入り史上初のマイナス圏で引け。この暴落にリスクオフの展開となり、豪ドルも売られて0.63台前半まで下落した。21日は、前日のフォロースルーから豪ドル売りが継続、週安値となる0.6254まで下落したものの、WTIがプラス圏へ戻したこともあって下げ渋った。22日は、豪3月小売売上高が前月比+8.2%と歴史的な水準となり、直後の反応は薄かったものの豪ドルはじりじりと買い進まれて0.63台前半へ。海外時間でBrentが急落する場面もあり、豪ドルは0.63台半ばを前に上値の重い展開で引けた。23日は、原油持ち直しや米景気対策法案第4弾の可決を受けグローバルに株高の展開で、リスクオフ巻き戻しに豪ドルも買われて一時週高値0.6406をつけた。しかし、米製薬会社の新型コロナウイルスのワクチン開発に関する臨床実験失敗が伝わると、米株が上値を削る展開となり、豪ドルも0.63台後半でもみ合いとなった。24日は、特段材料なく0.63台後半のレンジ推移が継続。米株高や原油上昇を受け、取引終盤にかけて豪ドルはじり高の展開となった。対ドルで0.6397レベル、対円で68.67レベルで越週した。

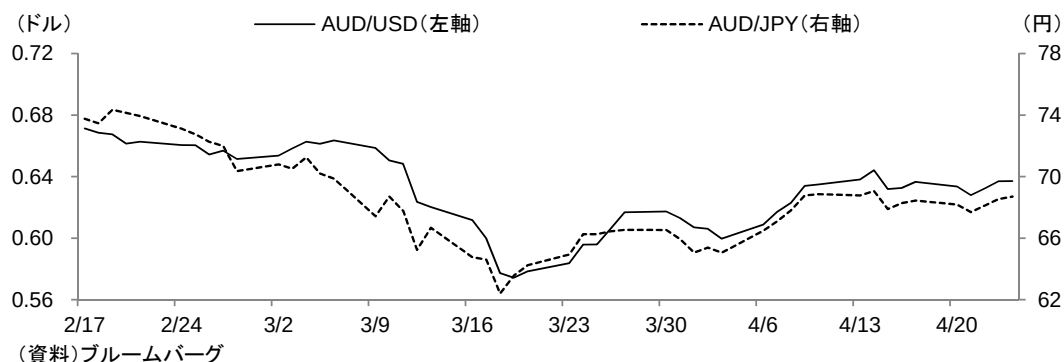
今週～来週の豪ドル相場は堅調推移を予想する。先週WTIが暴落する場面あったものの、限月交代もあって徐々に落ち着きを取り戻しつつある様相。リスクオフムードも徐々に収まってきており、従来通り新型コロナウイルスの影響の方にフォーカスはシフトしていると思われる。豪州の感染拡大はペースダウンしており5月1日(金)にもロックダウン解除を見据えている状況で、早期の経済活動再開が期待されている点が豪ドルをサポートしよう。5月5日(火)にRBA金融政策決定会合が控えるが、政策金利は据え置きで、雇用環境など外部環境の悪化に引続き緩和政策を取る旨を強調するに留まると予想する。その他では、4月29日(水)に豪1～3月期消費者物価指数、5月1日(金)に3月小売売上高、7日(木)に3月貿易収支が発表される。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(4/20～4/24)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6254 高値 0.6406 終値 0.6397

(対円) 安値 67.29 高値 69.01 終値 68.71



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。